

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2011
課題番号：19530471
研究課題名（和文） 自然環境を媒介とした共同性構築過程に関する研究—人と自然の関係誌を読み解く—
研究課題名（英文） Restructuring of Communal life : Narrative about nature as local heritage
研究代表者
関 礼子（SEKI REIKO）
立教大学・社会学部・教授
研究者番号：80301018

研究代表者の専門分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：負の記憶、世界遺産、物語、共同性、自然環境（の保全）、フィールドミュージアム、観光資源

1. 研究計画の概要

(1) 人と自然の関係誌を読み解き、コモンズとしての自然が、当該自然を利用してきた人々の正当性を担保するかたちで、保護されていく過程を明らかにし、共同性の再構築が自然環境の保護や汚染の未然防御に作用する過程を「主観的な環境評価軸」という視点から析出する。

(2) 遺産化する自然環境と地域振興との間で生じる葛藤や諸矛盾をヒントにしながら、共同性をめぐる人と自然のダイナミズムを明らかにする。

(3) 公害など自然環境をめぐる「負の記憶」を有する地域で行われてきた、民俗行事という形態での「負の記憶」の伝承可能性について考察する。

2. 研究の進捗状況

(1) 都市の緑地ネットワークの保全のために、私有地である農地内に残されたヤマ（防風林）を自然環境保全地区指定する帯広市の政策を事例とし、ヤマが残されてきた背景と保全地区に同意した人々の意識やその変容について明らかにした。現在、ヒアリングデータを取りまとめ、人々の語りを記録として残す作業を行っている。

また、えりも町や沖縄県中頭郡とやんばるの事例から、自然環境の主観的な評価軸が他者の視点への対抗や同調によって形成されていく過程について分析を進めている。えりも町については論文として発表済みである。

(2) 自然環境の遺産化については、矛盾を抱えながら再構築されざるを得ない共同性、戦略的に再構築される共同性、保護のゾーニングから外れたところで再構築される共同性という点からアプローチしてきたが、調査研究が進展するにつれ、自然環境保護と開発問題の歴史が観光現象と密接に絡み合っていることが明らかになってきた。

そのため、視点を広げて、日本にける開発が、一方で既存の観光資源を消失させ、他方で観光欲求をドメスティックに形成するという文脈で論じることができるといふ仮説を得ることができた。

(3) 足尾・水俣・阿賀野川における念仏講や地蔵祭など、地域の伝統的な民俗宗教に組み込む形での記憶の伝承と、教育を通じた近代的な枠組みでの集合的記憶の残し方、そしていわば両者を融合させる形態での自治体の政策的な記憶の再構築の在り方を調査研究してきた。

地域の共同性に即した記憶の伝承は、望ましい社会環境の生成につながると同時に、環境教育ツアーによる地域活性化に資する資源形成過程としても期待されている。その具体例を阿賀野川フィールドミュージアム事業にみながら、共同性と記憶の再構築過程について分析した（印刷準備中）。

また、足尾・水俣・阿賀野川をつなぐインフォーマルな人々の関係が、それぞれの地での地蔵開眼を通して可視化された「祈りのネットワーク」となることの意味と、地蔵の宗教性との関係について、考察を進めてきた。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由)

自然環境の保護運動の成功が、地域の内発的発展を促したという1970年代の事例以降、伝統や民俗を軸にした新たな共同性の創造や再構築が各地でみられた。そうした事例を観光現象と結び付けることで、自然が持つ公共性と共同性のダイナミズムに関する議論をより深めることが可能になりつつある。

また、「よそ者」論にみられるような他者の視点を内在化する在り方は、日常との切断によって生じる観光から、旅するように住まう現代の「移住」現象と接合させることで、新たな可能性を持つことになる。

したがって、本研究から、これまでは中心的な命題としては扱われてこなかった環境と観光をめぐる論点を展開させうる方向性を見出しうる。

4. 今後の研究の推進方策

成果とりまとめの最終年次となるので、人と自然との関係性の変容を軸にした自治感覚の生成過程について調査研究をすすめるとともに、以下のような3部構成からなる報告書を念頭に成果をとりまとめる。

第1部、物語としての自然

第2部、持続可能な環境と観光

第3部、日常と非日常の人生の記憶

第1部では、人々の暮らしの変容を開発やという出来事と関連させながら紐解き、そこにおける共同性の再構築過程を明らかにする。第2部では、明治時代より「外客」が観光のまなざしを向ける場であった海の開発が進み、他方で登山など近代的なまなざしが向けられる場であった山の観光開発が行われるなど、環境と観光の関連性についてまとめ、「負の記憶」を資源化の意味を考察する。第3部では、人々の生きる日常における、人と自然との関係に関するデータ、「負の記憶」を抱える人の語りに関するデータを記録として残す。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①関礼子、自然環境保全からみた漁村の多面的機能、『地域漁業研究』49巻3号、91 - 106、2009、査読有

②関礼子、感性で物語る環境、『感性哲学』8巻、45 - 58、2008、査読有 (但し招待論文)

[学会発表] (計3件)

①関礼子、自然環境保全からみた漁村の多

面的機能、地域漁業学会 (於広島大学)、2008. 11. 9

②関礼子、マイナスを逆転させる環境自治の『物語』、感性工学会感性哲学部会 (於宮城大学)、2008. 3. 7

[図書] (計1件)

①関礼子、半栽培の「物語」—野生と栽培の「あいだ」にある防風林、宮内泰助編『半栽培の環境社会学—これからの人と自然』2009、180 - 200、昭和堂